

「半年後にまた、
デートをしよう」

2010/01/16

コノヤロウ、思つて、どうやら目の前の菓子に夢中で僕に
気付いていない呑気な後ろ頭に帳面を振り下ろした。

小気味いい音が鳴つて、かくんとその人が前のめりに首を
揺らす。

遠慮をしないことが、この人に対する僕なりの礼儀のよう
なものだった。

「
「……………」
「！！」

あれ、つて思つた。
僕は口を動かしているのに、声が聞こえない。目の前の人
もそうだ。僕が叩いたせいでずれた帽子を押さえながら振り
返つて、涙目で何かを訴えている。それに対して僕も何か言

葉を返して、さらに苛立つて、ひっぱたく。

目の前の人が追撃を逃れようと必死に何かを謝っている。
僕は腕組みをして仁王立ち、涙目の謝罪をどうやら欠片も信
用していないようだ。

確かに僕は僕で、何かを話していて動いているのに、同時
にそれを外側から見ているような感覚もある。

相変わらず音がしない。

まるで音のない紙芝居。僕はこれから起こる出来事を知つ
ていて、読み上げていくものの結局物語の外側にいることに
変わらない。

そんな感じだ。

どうしてだろうとか、ここはどこだろうとか、思っている
はずなのに滞りなく場面は進行していく。疑問の余地すら許
さない自然さで、まるで当たり前前のように。

不思議と懐かしい感じがした。目の前の人が小さく苦笑し
て、ぎゅう、と胸の奥にかすかな痛みが生じた。

「

一転して満面の笑みを作ったその人が、棒付きの飴玉をく
れるのだ。

僕はわざと迷惑そうな表情を浮かべてそれを受け取る。

でも、いつもは飴玉はかみ砕いてしまう僕だけど、この時
は、この飴玉だけは、きちんと大切に食べようと思うのだ。

僕はこの場面を知っている。

……………本当に？

じて息を止めた。

落ち着こう、思つて細く長く深呼吸をすると、途端に耳に
がやがやとした喧騒が戻ってきた。

「どうしたの？」

そいつは訝しげに言うけれど、つさに意識と思考がつか
らず、いろんなことがわからなくなつて宙ぶらりんな心もた
さの中に放り出される。

俺は誰。

で、

アンタは誰だ。

混乱して見つめる中で、そいつがへにやりと表情を崩した。

無表情だと何故かおそろしいような雰囲気、そうやつて

笑うだけで姿を失くした。

そこには人好きのする笑みを浮かべた男がひとり。

だからこわい、という感想も、一体そいつの何に対して感
じたのか、そんなことさえ忘れてしまう。

そいつは身を退いてきちんとイスに座りなおしたあと、テ
ーブルの上のトレーからポテトをつまんで口に放り込む。

口をもぐもぐさせながら、からかうように笑っている。

「ねえ君どうしたの？ そんなにぼけつとして。もしかして
寝不足？」

「……………えつと」

ばん、と目の前で手を合わされて、俺ははつとして瞬きを
繰り返した。

「え？」

俺の目の前で手のひらを合わせているやつがいる。テー
ブルの向こうから身を乗り出しているそいつが、両手をテー
ブルについてさらにぐい、とこっちに顔を寄せてくる。俺をの
ぞき込んでくる瞳が異様に近い。

驚いてとつさに体を引いたらどこかにぶつけたのか、がた
ん、とテーブルが大きく音を立てた。

幸いというか、目の前のそいつが手をつけていたおかげで
テーブルが揺れてのっているものがこぼれる、ということ
はなかったが、自分で立てた音に顔をしかめて落ち着け、と念

俺もひとまずそいつにならって、同じようにトレーの上のポテトをつまんで食べてみた。

そのまま半分くらいを食べてしまいがら、ようやくちらりと正面を見る。

確認するように思う。

今はストローを噛んでずぞぞと音を立てるそいつは、俺の遠い親戚で知り合い。たまに田舎から上京してきては俺の部屋を宿代わりにして帰っていく、ほんの少しだけ面倒なやつ。勝手に日程を決めて、俺が何を言おうとも自分勝手に押しかけてくる。

そしてその度に俺はなぜだか遊びにつき合わされるのだ。

だからそいつは、そんなに近い血縁でもないのに親戚の中で一番親しい。

ここはマックで昼時だから混んでいて、俺はこいつと昼メシ中。

食べかけだったテリヤキバーガーをかじって、何となく眉間を自分でみたのは、あり得ないことに今少しだけだが夢を見ていたような気がしたからだ。食事中に寝てたんだろうか、俺は。いくらなんでもあんまりだと思おう。

疲れているのだろうか。こいつのいうとおり、寝不足か。でも最近そんなに不摂生をした覚えはない。試験もなければ攻略中のゲームもない。昨日も、適当に眠くなった時間に布団に入ったはずだった。

とりあえず俺は、行儀が悪いのでそいつの脳天に軽くチョ

ップを決めて、音を立って飲むのを止めさせる。

そいつが何事か唇を尖らせて文句を言う。俺はその文句を適当に聞き流す。語尾にもん、とか付けるな、そんな顔をして見せても別にかわいくもなんともないし、ほだされてやる気にもならない。第一こいつ、俺よりも年上じゃなかっただろうか？ だったらもつとちゃんとしてほしい。

「君は相変わらずオレにやさしくないよね」

そう口では言うくせに、なんだかうれしそうだった。

あれ、と何かを思い出しそうになって眉間にしわを寄せる。夢を、そうだ、あり得ないことに俺は、こんな真昼間から外で食事しながら夢を見たような気がする。いくらなんでもぼーっとしすぎだろうとは思うけれども何か引つかかる。

「ねえね、映画何時からだっけ？ 別に急がないけどさ、そんなにゆっくりして大丈夫？」

「まだ大丈夫だろ。一時間あるはず。……………人の飲み物勝手にとるな！」

「えー。いいじゃん別に」
「いいけど一言断れ」

覚えていたけれど、一応確認のためにサイフからチケットを取り出してみた。大丈夫、まだ時間はある。

そいつはストローを噛んでにやにや笑っている。俺のなん

だから嘔むなと言いたい。

「ねえ、なんかこれ、デートみたいじゃない？」

………やけににやにやしてると思ったらそんなことか。

俺は無意識に鼻から息をもらしてその発言を聞き流した。

わざわざ田舎から出てきてデートする相手が俺なんて残念なやつだな、と思ったのが顔に出たのかそいつはまた文句を言うが、それだって適当に聞き流す。

「もうそれ、全部飲んでいいから」

「ほんとに？　ありがと」

これだけでとりあえずは機嫌が直るのだから簡単なものだ。俺はケータイで時間を確認して、三十分前になったら移動しようと思った。

残念なやつだと思う。

「でも良かったでしょ？　青春ー！　つてかんじでさあ」

「うん、まあ」

悪くはなかったので文句はない。というか基本的に、こいつと遊びに来て特別不満を抱いたことがない。

なんでだろうと考えて、もしかしたらせつかく遠いところから遊びに来たのだからこいつの好きにさせてやろうと思っ
ているのかもしれない。我ながら優しいもんだと勝手に満足してみた。

「それで、これからどうする？」

「時間あるならそのへん適当にぶらぶらしたいけど、君は平気？」

「別に、暇だから何でもいよ」

「じゃあ、適当にぶらぶらしますか」

映画館も併設しているこのショッピングセンターは、一周するだけでもだいぶ時間を潰せる。店の種類も豊富で、ぶらぶらするにはちょうどいいところだった。

ねえやつぱりこれデートみたいじゃない、とそいつはまたにやにや笑う。

さみしいやつだな、そんなにデートがしたければ彼女でも作れよ、と今度こそ俺は思ったことをそのまま言った。

映画はアニメだった。

わざわざ田舎から出てきて見るのがアニメなんて、本当に

怒ると思ったのにそいつはにやにやと笑ったままだった。

「だって君がいるじゃない」

それがさみしいと言っているのに、わからないやつだと思
った。

思ったのに、それでもなんだか悪い気がしなかったので逆
に俺が困る。

何でこんなに、妙にうれいようなくすぐつたい感じがす
るのか。

俺も大概さみしいやつなんだろうかと思いついて遠い目に
なってしまった。

休みの日に、デートの相手が遠い親戚の年上の男とか。

「ねえねえ君、新しく服買う気はない？ どうよこんなん」

「パス。そういうのは趣味じゃない」

「えー、似合うと思うんだけどな」

まあ楽しいのならそれでいいかと、投げやりに無理矢理に、
考えることを止めてしまった。

それよりもまだもう少し寒い時期は続くのだから、もうひ
とつくらいあたったかそうな服があつてもいいのかもしれない。
い。

どんなのがいいかと思いつかべながら、適当に店先を冷や
かして歩くそいつについていった。

一通り回って買い物も終えて、外に出たらもう暗くなつて
いた。

建物の中にいると気が付かないがやはりこの時期、日が落
ちるのが早くて少し驚く。

どこかで夕飯でも食べてくか、と誘ったらそいつは少しだ
け悩んだ後ゆるく首を振った。

「行きたいけど、電車の時間があるから今日は止めとくよ」

ということは、こいつはもうこのまま田舎に帰るのだろう。
するとまた当分会えないことになる。こいつの住んでいる
ところは遠くて、俺のほうから遊びに行ったことは一度もな
い。いつも、そいつが来るのを待つだけだ。

特別さみしいわけではない。でもさみしくないわけでもな
い。きつとこいつといる時間が俺は嫌いではないからだ。変
に緊張することもなく、いっしょにいると不思議と落ち着く。
俺にとってそいつは、そんなやつだ。

そんな俺の思いなんかきつと知らないで、そいつはまるで

またすぐにも会えるのだというように一言、またね、と軽く手を振った。

「今日はありがと。うん、楽しかった」

「別に」

「じゃあね」

あっさりど。

そいつはひらひら手を振りながら俺に背を向けて歩いていつてしまふ。

自分勝手なやつなんだ、と改めて俺は思う。

自分の都合で押しかけてきて、連れ出して、帰っていく。

らしいな、と思いつつも、置いてけぼりにされたような、

そんな気持ちになってしまった。

らしくないのは俺の方だ。

俺はポケットから手を出すこともなくそいつを適当に見送る。駅の方へ向かうそいつの後ろ姿が人ごみに紛れて見えなくなる。

俺は俺で、駅とは反対方向、自分の家へ足を向ける。

ポケットに手をつ突っ込んだまま歩く。特に急ぐことはないから人波に飲み込まれない程度の速度で。

昼間に見たような気のする夢について何となく思い出してみるくらいには退屈だった。

誰かといっしょにいたからかもしれない。誰かといっしょにいと、ひとりになったときにその騒がしさを引きずって、どうしても物足りない心地になる。

あいつ、せつかく田舎から出てきたならもう一泊していけばいいのと思う。

面倒だけど、迷惑ではない。

どうせ気ままな一人暮らし、何泊かくらい、していつても構わないのに。

「……………あれ？」

ふと思いついた疑問にぎくりと心臓が跳ねた。

思わず足が止まった。

迷惑そうに人が俺を避けていくけれども、そんなことに構っていられないくらい、嫌な予感がしてざわざわと心臓が騒いでうるさい。

服の上から胸のあたりを拳で押さえつけても、ざわざわと、嫌な感じが全身に回っていつて心臓の音が早くなる。

落ち着け、と思ふのになまかくなかった。

あいつは。

やたらと混乱したがる頭で必死に考えてみる。
あいつは、たまに田舎から上京してきては俺の部屋を宿代わりにして帰っていく、ほんの少しだけ面倒なやつ。勝手に日程を決めて、俺が何を言おうとも自分勝手に押しかけてくる。

じゃあ、今回は。

今回あいつは、俺の家に何泊していった？

昨日のことが思い出せない。おかしい。だって少なくとも一晩は、家に泊まっていたはずなのに。

今朝のことは覚えてる。起きて、適当にだらだらしながらテレビ見てて、そこで映画の宣伝をしたからそれを見たと言いついて、じゃあ出かけるか、ということになって。でも思い出せない。

昨日、あいつといっしょにいた記憶が見つからない。

「……………うー！」

ざわざわと心臓から送り出されて、今度は足元から這い上がってくるような騒がしさ。多分、不安とか、そんなもの。とにかく話を。

会って、話を。

話をしたからどうなるのか、そんな具体的なことまでは考えられなくて、それでも今こんなにも頭の中を占めている不

安をどうにかするためにはあいつに会って話を聞かなければいけないと思った。

今ならまだ間に合う、間に合うだろうか。

電車の時間なんかわからないからとにかく走った。人ごみを、すり抜けるように駆けて、駅に向かう。

定期券を持っていたからそれで改札を抜けた。

そのままホームに向かったけれども、もうそこに電車はない。

電車は出てしまったばかりなのかもしれない。ホームに人は多くて、改札に向かう階段に人がたまっている。

呼吸が荒くて息が苦しかった。空っぽの線路を見て突っ立っていると人につかる。はっとしてようやく、人の少ないところに避けた。

イスが欲しかったけれども近くにはない。仕方なく脱力感に耐えながら、ポケットからケータイを引っ張り出した。

間に合わなかったけれども、それならせめてメールでも。電車に乗ってるなら電話はだめだ。とにかくメールでも何でも、連絡を。

アドレス帳を開いたところでまたぎくりと動きを止めて、

今度こそ俺は、何か叫び出したい衝動に駆られた。

顔が引きつるのを止められない。頭の中がどんどん混乱していつ、どうして、とそれだけが敷き詰められていつて苦しくなる。

髪を握りこむようにして頭を抱えて、爪が頭皮に食い込んで痛かったけれども、その痛みでも落ち着くことはできやし

ない。

嫌な予感はどうどん大きくなっていったって、ぐらぐらと、足元さえおぼつかないような不安に押しつぶされそうになる。

愕然とする。

連絡先がわからない、なんて、そんなこと。

そんなこと、ありえないのに。

ありえないだろ。だって、普通に考えて。

いつも自分勝手に押し付けてくるはずなのに、あいつが俺の部屋に泊まっていった記憶がない。

それどころか俺は、あの人の名前さえわからないのだ。

ありえないだろ、そんなこと。

どうしてそんなことに、今まで、気が付かないでいられたのか。

何かが変で、どこかでねじまがって狂っている。
やっぱりこれ、おかしいんじゃないか。だって、何でわか
らない？

ぐにやりと視界が回って歪むような感じがした。全てがあやふやになる。吐き気すら伴う焦燥感に、どうしたらいいのかわからない。

なんで、どうして。そんなはずなのに。

でもどうしてもわからない。

混乱する頭の中に、ぼつぼつといくつかの映像がひらめいた。

情けなく笑う人。無表情でいれば怖いくらいなのに、目尻を下げて、笑って見せるだけで胸が苦しくなる。

差し出される飴玉の色は赤。噛まない、そう思う。

夢の話。俺が思い出したいのはこんなものじゃない。ついこの間、昨日の記憶なのに。浮かぶのは無関係な夢の出来事でも知っている。夢なのに、この場面を俺は知っている。

僕がいてあなたがいて。

でも知らない。ここは、どこだ？

僕は誰。

で、

アンタは誰？

頭が引き裂かれそうな鋭い痛み、目に見えている景色が傾いた。

堪えきれなくてずり、と背後の柱に寄りかかるようにしてそのまま倒れ込む。

「ちよつと、君……………」

誰かの声がする。誰か、人が駆け寄つて来てくれた。気遣わしげな声音に少しだけ安心して、申し訳なくなつて、気が遠くなる。

きつと俺はそのまま、気を失つてしまった。

やつぱり寝不足だったのかな、だから昼間つから夢なんて見るし、昨日のことも覚えていない。

そうだったら簡単でいいのにと思つたのに、それはこのおかしなことの正解ではないと何となく知つていた。

でもそれ以外のことはもう、何一つわからないまま目を閉じた。

指先の感覚がおぼつかなくて、意識がふわふわと浮ついて、半分眠っているようにおだやかだ。

目を閉じているのか何も見えない。

それでもきつと、気付けば見知つた時間の中にいるのだらうという予感がある。

「どうしたの？」

やさしく聞かれる。きつと目を開けばのぞき込んでくるあなたの瞳に射抜かれる。

僕はあなたのことを知らない。
でも。

……………僕は、この場面を知っている。

「全部夢だとしたら？」

瞬きをするような場面の転換が起こる。いつの間にか僕はそこにいて、帳面を抱えたまま、紫の服を着たその人の横顔を見つめている。

その人は机に向かつているものの、広げられているのは菓子類ばかりで僕はうんざりとした気分になるのだ。

そんな僕にはかまわず、その人はふざけた風を装つて、神妙そうな声で呟く。棒付きの飴玉を舂めながら。ちらりとひらめかせる舌先は嘘みたいになくて僕はかたい唾を飲み込んだ。

その人はその飴玉をくるくると回しながら、笑つた視線を僕の方に流してくる。

くすくすと、喉を震わせて笑い声を立てている。

「そんな顔しないでよ」

どんな顔を、しているとどうだろうか。
僕はおぼつかない感覚で立ち尽くしたまま、動けないまま、
あなたを見つめる。

「大丈夫、また、目を覚ましたら全部元通りだよ」

それは嫌だと言いたかったのに、少しも体は動かなかった。
嫌だ、僕は、忘れたくない。

ここでの出来事もこれからのことも、もちろん今までこと
も全部。

僕のこと、アンタのこと。

僕は何一つ忘れたくなかないのに。

「また、半年後」

その人は棒付きの飴玉を僕に差し出す。まるで花でも差し
出すように、祈るように丁寧な仕草、泣くのを堪えるような
笑顔で、動けない僕の手をとってやさしく飴玉を握らせる。

バイバイ、とその人が僕の視界に手のひらをかざす。

一瞬だけ唇をかすめていった熱。甘い吐息が、吹き込まれ
て。

僕の嫌だ、という叫びを無視して無情にも、ぶつりとそこ

で意識は千切れる。

気がついたら手をめいっばい伸ばして、腕が痛かつ
た。

瞬きを繰り返してようやく、今まで自分が眠っていたとい
うことに気が付いた。

それを思い出せば今どんな状況でどうして自分が寝ている
のか、あつという間に思い出せて思わずぱたりと手を目の上
に落として呟いた。

「……………うわあ」

確か駅のホームで倒れたんだ。ってことはここは駅の救護
室か何かか。まさか自分がそんなところの世話になる日が来
ようとは。そもそも倒れたとか、なんか情けない。どうした
俺。そんなに体調が悪かったのか？

原因はともかくとして、人前でぶっ倒れたと言うことが恥
ずかしくて頭を抱えたままごろごろ転がりまわりたくなった。
今寝ているのは自宅の布団ではなくベッドで、そんなこと

をしたら間違はなく落下コースなので我慢したけれど。

「あ、起きた？ 大丈夫？」

しゃ、と仕切りのカーテンを引く音。

そこにいたのは大学の友達でそれはさすがに意味がわからない。どうしてこんなところにいるのか。

「たまたま駅にいたから。あとさすがに友達が倒れてたら心配になるし」

だから待ってた、というそいつに感謝したいんだけどもやっぱ恥ずかしくてもう一度、今度は聞こえないようにうわあ、と叫びた。

恥ずかしい、実に恥ずかしい。

そもそもどうして倒れたんだよ、俺。

何か夢を見た気がする。ぐるぐると、いろんな場面を断片的に。

ゲームのやりすぎだろうか。寝不足か何かか。でも最近はずもなければ攻略中のゲームもない。

昨日も、適当に眠くなった時間に布団に入ったはずだった。

そこまで考えて俺はあれ、と眉を寄せる。

何か引っかけたか。

何か、違和感みたいなものが。

気になったのにそれを思い出そうとしたら途端に薄れてわ

からなくなってしまう。

あれ、と一度目を閉じてみる。だけど瞼の裏側に、思い浮かぶものは何も無い。

もしかしたら夢のことなのだろうか。だから、こんなにすぐに忘れてしまう。

何にしても、すぐに忘れたということはきつと、そんなに大事なことでないはずだ。

最終的にそんな結論を出して、俺は体を起こしてベッドからおりた。

「気分悪かったりふらふらしたりしない？ 立てる？」

「全然平気だよ。ほら、びんびんしてる」

そんな俺の言葉が信頼できなかつたのか、それともただ単に心配なのか、友達はわざわざいっしょに帰ってくれると言った。

お互いに家も近いということもあって、特に断る理由はないので二人で駅員に声をかけて礼を言ってから改札を出た。

「ところで駅で何してたの？ 出かけてきた帰り？」

「んー？」

どうだったっけな、と思い返してみる。今日は……………何をしていたっけか。

確かマックで昼を食べた気がする。そのあとぶらぶらと買

い物をした気もする。

でもそうなると電車を使う必要がないから、何で駅にいたのか、意味がわからない。

わからなかつたけれど、まあそんなところ、と適当に返事をしてしまった。

ふうん、とそれ以上突つ込まれなかつたことにほっとした。

「それよりどつかで夕飯食べていかないか？ 家帰って何か作んのめんどくさくなつた」

「ん、別にいいけど。やつぱ大変だよ、一人暮らして」

「気は楽だけだなー自由だし。でもどうしても家事が面倒」
「だろうね。いつも大変そうでもない」

じゃあ僕、夕飯いらないうって連絡するよと友達がケータイを取り出して電話を始める。

ゆつくりになつた友達の数度にあわせて歩きながら、ちよつとだけ嘘だつたな、と俺は思った。

確かに食事を作るのは面倒だ。

でもそれだけじゃない。

何となく、一人でいるのがいやだと思つてた。

どうしてそう思つたのか、理由がわからなかつたし、そんなことを突然言うのもどうかと思つたから言わないけれど。

近所のラーメン屋に行き先を決めて、学校やら提出期限の

近いレポートの話、他にもゲームやらテレビの話をしてた。

話しながら頭の片隅ではまだ、未練がましく何がこんな
に気になつているのかとぐだぐだ考えていた。

俺は誰かを追いかけたかつた気がする。

会つて、話を聞きたかつた気がする。

それなのにもう、その相手が誰だかわからなかつた。

誰かを探していたような気がするのにもう思い出せない。

やつぱりただの夢のことだつたのだろうかともやもやする
思いを抱えながら、友達の言つた冗談に笑つて、頷いた。